【短歌の部】

選評　二宮信子

◎優秀賞

くるり舞い紅葉の種は部屋内に宇野千代の庭強き風吹く　（相川美津江）

初句「くるり舞い」に臨場感があふれ心地よい一首。紅葉の種の歌は初めて目にしました。いい歌材、いい場面をとらえられています。舞いと風吹くで一首に動きが出ています。種が飛んでそれからと想像力を掻きたてますが、種は鉢に埋められて木になっているとお聞きして安堵しました。

◎入選

紅葉のライトアップは今消され空にのこれるスーパームーン　（正木紀子）

宴が終ってからを詠まれて成功です。「今消され」の瞬間の表現が的確で、読者の気持ちにすっと入ってきます。消された後のスーパームーンも歌に広がりを見せています。

百本もよくぞ植えたりもみじ葉の色為す庭や千代のもてなし　（藤井淳史）

まず「百本」がいい。百本の具体数で歌がくっきりと立ち上がっています「よくぞ植えたり」の表現もこの歌を強く浮き立たせています。のびやかな上句が魅力的で千代先生のスケールの大きさ、おもてなしの大きさを感じさせる一首となっています。

千代もみじ重なりあいしその先のハートの型の秋天仰ぐ　（蔵重敏恵）

一読してすっきりと読者の心に届く歌です。もみじ葉の重なりあっている空を仰ぐと、ハート型に見えた瞬間に秋天が広がっている、という作者の発見がこの歌を成立させ、楽しいものにしています。秋の空は春の空と違って淋しさを感じさせることが多いのですが、このハート型で楽しいものにしています。